日産科学振興財団研究報告書

東北マタギの伝統的狩猟活動から見た

動物資源の持続的利用に関する学際的研究

Interdisciplinary Research for the Maintainable Utilization of Animal Resources as seen in the Traditional Hunting Activity of Matagi, Tohoku District

研究代表者　東京大学大学院人文社会系研究科　助教授　　佐藤宏之

Graduate School of Humanities and Sociology, University of Tokyo,

Associate Professor, Hiroyuki SATO

野生動物の保護・保全対策が、従来動物管理学的手法が突出した地域行政的な管理施策に偏重していたために成果を挙げていない原因を解明するため、山形県小国町を調査地に選定して、学際・総合的な調査研究を実施した。調査は、自然地理学・動物管理学・動物生態学・歴史学・文化人類学・考古学・民俗学の研究者が参加して行われた。その結果当地域の伝統的狩猟者であるマタギを中心とした住民が、小国盆地が歴史的に開発された当初から現在まで、同時代の社会経済システムに対応した可変的かつ柔軟な生活形態を作りあげていたことが理解された。集落の周辺では自然環境を巧みに改変しながらも、その周囲の動植物資源を持続的に利用するシステムを組み上げていたのである。日本各地における野生動物保全策の成功は、地域住民の歴史的な経験知・生活知を考慮・尊重した対策の策定にかかっている。野生動物保全の主体者は、地域住民をおいてほかにない。

As far the measure of protection and conservation for wild animals is biased to mainly the way of wild life management, it can not get the good results. We research it from the viewpoint of the local inhabitants by interdisciplinary methods. The inhabitants of Oguni town, Yamagata prefecture, where is our research field, is making the flexible and organizational life system as the maintainable utilization of natural resources such as animals in according to contemporary socio-economical systems from the first step of the development. We must take measures to conserve for wild animals, considering the experienced knowledge of local inhabitants.

１．　研究目的

近年日本列島の野生動物の保護・保全の問題が深刻化し対策のための調査研究が活発に行われているが、はかばかしい効果を挙げていない。その主な理由は、対象の自然科学的研究と物理的な対処療法的施策の追求に偏るためである。問題の根本的な対策は、対象地域の具体的な環境に居住してきた住民の歴史的背景を探り、その自然環境を資源として持続的に利用してきた共生の生活知を、時代の社会経済的背景の中に探らねばならない。山形県小国町を例として、その具体的データを獲得して分析を加え、実現実行可能な保全施策を提言することを目的とした。

２．　研究経過

本研究では、調査研究の中心となる山形県西置賜郡小国町において平成 12 年 5 月 13　14 日、現地調査説明会、合同会議（役場・猟友会・森林組合、および本研究メンバーによる）を開催し、町民向けに本研究の主旨説明および現地の関係協力機関との詳細な調整を行った。この後、担当分野別に調査を開始し、平成 13 年 11 月 23　25 日にかけて町民公開のもと現地調査中間報告会を実施、町民との意見交換をふまえて調査メンバーの打合会議を実施した。さらに研究期間終了に伴って平成 14 年 12 月 7　8 日には現地調査報告会とメンバーによる打合会議を実施し、本研究の成果の確認と出版に向けての執筆分担を決定した。成果については農山漁村文化協会から本年 10 月に出版を予定している。

３．　研究成果

本研究においては２つの点で重要な成果が得られた。一つは、既存の学際的研究に見られがちであった自然科学分野と人文社会科学分野の断層を回避し、融合的成果を実現しえた点である。もう一つは、野生鳥獣の保全管理上重要な問題となる野生動物資源の持続的利用に関する成果である。

２-１．住民による持続的資源利用の智恵

従来から有識者の中には、農業や狩猟、漁撈、林業、採集などを基盤生業としてきた地域住民は、野生鳥獣などの自然資源に対する管理能力に欠けているといった見方が存在する。しかし、本研究においても地域住民がこれらの資源を刹那的に大量に消費し、枯渇させたという歴史的事実は見られないことを確認した。明治近代以降、納税形態が金納となってより顕在化したと考えられる現金獲得指向の生業の台頭によって、市場的価値の高い資源に関しては、資源の枯渇と村落内の競争を回避するためにさまざまな村決めが設定されて、資源利用の持続性を保証するための内部的規制が幾重にも設けられていた。

調査地のひとつ小国町五味沢地区や同じ山形県内の東田川郡朝日村大鳥地区などでは、近年の 1998 年から 2001 年にかけての厳冬期において漸次ノウサギが減少傾向にあったため「沢止め」が実施され、指定された沢内のノウサギ猟が自主規制された。そして個体数が回復し増加傾向を示した 2002 年冬から、徐々に規制を緩和しノウサギ猟は再開されて

いる。このように伝統的狩猟活動の規範を遵守してきた地域では、枯渇が危惧される動物種の捕獲規制は現実に実行されており、個体群回復に寄与しているといえる。規範の遵守は、集落構成員各人が互いを監視し合うというかたちで行われるが、規制をかけるかかけないかの基準は狩猟経験の豊富な古猟師の経験知に委ねられている。

２-２．地理的環境と生業の関係

中心的調査地となった山形県小国町の地形的な特徴は、小国盆地を中心に周辺には火山岩および堆積岩類を基調とした標高 1000 メートル未満の山々で構成された小起伏山地と朝日・飯豊連峰など隆起と浸食によって形成された硬い花崗岩類からなる標高 1000 メートル以上の大起伏山地によって構成されている。また、この小起伏山地が村人の言う「里山」に、大起伏山地が「奥山」に符合しており、植生調査からも濃厚な使い分けが認められた。

２-３．罠猟にみる持続的資源利用システム

さらに伝統的狩猟技術のなかで、最も変移の乏しい罠猟に注目し、小国町南部の飯豊連峰山麓に製作技術が伝承されている大型獣用重力式罠を復元し、この技術を伝えたと伝承されている秋田マタギの同種の罠も合わせて復元した。

・小国町長者原　オオモノビラ
・秋田県北秋田郡阿仁町比立内　クマピラ
・長野県下水内郡栄村秋山郷　クマの陥し穴

これら３者共に学術的記録が行われたのは本研究以前に前例がない。とくに小国および阿仁で復元された罠およびこれを実施するための権利関係などの社会的環境、歴史調査から明らかとなった旅猟師の存在など、近世後半の東北地方山間部において大型獣狩猟の技術的拡散、波及という現象が生じていたという仮説を伝承との整合性を含めて確認することができた。

重力式の罠には、大型獣用だけではなくキツネ、タヌキ、ノウサギ、テンなどを捕獲対象とした中小型獣用のものも伝承されており、これらは対として存在した。前者は既述した大起伏山地にあたる奥山に、後者は小起伏山地にあたる里山に仕掛けられ、伝統的狩猟システムと地形、植生などの自然環境、集落構成員による集落周辺山地帯における資源開発活動とが連動し、組織化されていたことも確認された。すなわち、マタギなどに見られる伝統的狩猟システムは、その捕獲目的となる野生鳥獣の行動生態との関係上だけで説明されるのではなく、農耕や林業、旧焼畑地やその放棄後の転用の在り方など複雑な人間の生業活動による土地利用によって統合された中で形作られていたのである。

４．　今後の課題と発展

本研究のような動物資源の持続的利用に関する研究は、その対象が野生動物の生態行動研究と不可分の関係にあり、動物の食性行動に合わせた広域的な研究設定が求められる。これまでの研究では人間生活系を基準とした行政区内の研究に止まらざるをえなかったが、野生動物の保全管理と狩猟の将来的機能を基

底に据えた研究である以上、今後は野生動物の地域個体群の利用領域を基準とした地域生態系を包含し、複数の行政区にまたがる各山体（連峰、山地、山脈ごと）を単位とする研究の必要性があろう。野生動物の行動生態になんら意味を持たない行政区を基準とした研究は、既に限界にある。そのため、基礎研究として本研究のような周辺地域との関係を重視した学融合的研究の必要性は必須となるであろう。

日本各地における野生動物保全策の成功は、地域住民の歴史的な経験知・生活知を考慮・尊重した対策の策定にかかっている。野生動物保全の主体者は、地域住民をおいてほかにない。

５．　発表論文リスト

1. 梅本亨　2002『山形県小国町における自然環境：2001 年度梅本ゼミ報告書』明治大学文学部史学地理学科地理学専攻
2. 佐藤宏之編著　(印刷中)『小国マタギ：共生の民俗知』農山漁村文化協会　以下の論文を収録予定
   - 梅本亨「山地の気象」
   - 長谷川裕彦　「小国盆地周辺の山地地形」
   - 西城潔「杉林と雪害」
   - 佐々木史郎「毛皮交易と世界システム」
   - 田口洋美「小国マタギの過去と現在」
   - 佐藤宏之「共生の民俗知」
   - 東條光太郎「小国の木地師」
   - 中川重年「小国町の人為植生-北小国の農地の変遷を中心として-」
   - 花井正光「小国の伝統的クマ狩りの持続的維持を考える-長期継続実施された山形県ツキノワグマ生息状況調査から」
   - 羽澄俊裕「野生動物生息調査の現状と課題」
   - 原田信男「小国山間部の近世村落-その景観と暮らし-」
   - 藤村雅樹「東北地方の野生動物被害」
   - 牧田肇「ブナ林に見る自然と人」
   - 村上一馬「江戸時代に熊の胆はいくらだったのか」
   - 村上一馬「いつから猟師は鉄砲を使ってきたのか」
3. 佐藤宏之、田口洋美　2001「信州・秋山郷のクマの陥し穴」『法政考古学』第 27 集:pp,1-17.法政考古学会
4. 田口洋美　2000「列島開拓と狩猟のあゆみ」『東北学』3 :pp,67-102.東北文化研究センター
5. 田口洋美　2002「マタギ集落に見られる自然の社会化- 新潟県三面集落の民俗誌-」安斎正人編『縄文社会論』：pp,193-235.同成社
6. 田口洋美　2002「マタギ論-市場と生態系の狭間に生きる-」赤坂憲雄他編『いくつもの日本　第Ⅳ巻』:pp,123-146.岩波書店
7. 田口洋美　2002「狩猟、その具体への視点-東日本の山間部に見られる罠猟を中心に-」香月洋一郎他(編)『講座日本の民俗学　第 9 巻　民具と民俗』:pp,96-108.雄山閣
8. 原田信男編　2003『小国山間部村落の近世古文書調査報告：日産科学振興財団学術助成研究歴史調査班報告』東京大学大学院新領域創成科学研究科佐藤宏之研究室